

魅惑のニュージーランドワイン

文と写真—内田由紀 写真—長島あきお

このところ、ニュージーランドワインに注目が集まっている。1980年代半ばに、ニュージーランド産のソーヴィニヨン・ブランが世界的に大ブレイクし、フランスやイタリアのワインを押しつけて、世界の品評会で最優秀賞を取る銘柄も続出している。新世界のワイン生産地で、もっとも冷涼な気候に恵まれるニュージーランド。そのワインの魅力を現地取材を通してレポートする。

ニュージーランド(以下、NZ)という、オーストラリアとひとくくりにされがちだが、かたや大陸、かたや島国で、気候や土壌の違いなどから、まったく性質の違うワインができる。機械化を前提とした大量生産のオーストラリアに対して、ニュージーランドでは、小さな畑で個人がワイン造りの従事しているケースが多いのも特徴だ。そもそもNZという国は、面積は27万平方kmで日本の4分の3の広さ。四方を海に囲まれた島国で、南北に長く、2つの大きな島に分かれている。火山性の地形で起伏が多く、温泉も数多くあり……、と日本と似ているといえる。ただし、人口はわずか400万人。人より羊のほうが多いといわれるお国柄だ。19世紀にキャプテンクック

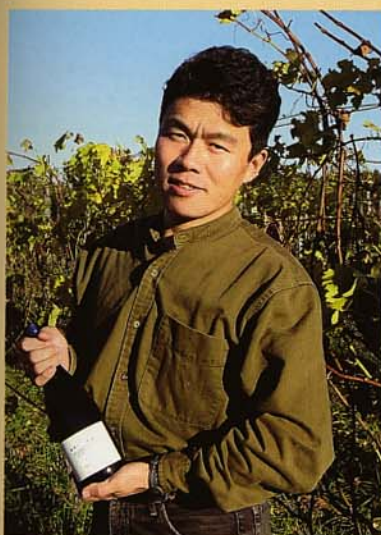
ニュージーランド生まれの日本ワイン!?

ニュージーランドのワイナリーに日本人がいるのをご存じだろうか。ただ働いているのではなく、自らのブランドワインを造っている。

彼の名は、楠田浩之さん(39歳)。大学卒業後、一般企業に就職したが、学生時代からの夢を実現すべく、97年にワインの醸造学で知られるドイツのガイゼンハイム大学に留学。そして2001年5月、ニュージーランドのワイン産地のひとつマーティンポロに移住した。楠田さん自身がいちばん好きな品種であるピノ・ノワールで「世界のトップクラスのワインを造りたい」と、ピノ・ノワール栽培に適したこの地を選んだのだ。すぐに畑をリースでき、翌02年に初めて日本人の手によるNZワイン

「KUSUDA WINES」が誕生した。初年度の生産量は、約1万本。ピノ・ノワールを始め、カベルネ・ソーヴィニオン、シラー、などを育てている。

リース契約が終了した今年は、友人でもあるシュールベルトワインの畑を借り、ピノ・ノワールのみに絞り込んだ。4月に摘み取り、現在タンクの中で熟成を待っている。「たとえ日本の土から生まれたものでなくとも、日本人が世界をあとと言わせるようなワインを造れたら」という楠田さん。2003年のヴィンテージは、年末には日本に到着する予定。楠田さんによれば「非常に難しい年。敵しかった状況を考えれば出色の出来になる可能性も」という。



日本での取り扱い

アサヒワインセラー

TEL 03-3951-6020

ワインの写真 アサヒワインセラー提供

楠田浩之さん